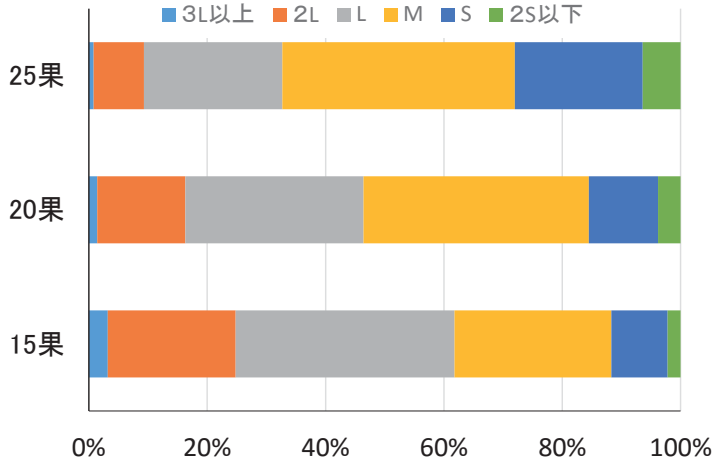
‘媛小春’の安定生産対策と貯蔵技術

強樹勢のため着果がやや不安定であるが、高接ぎ４年目頃から結実し始め、樹が落ち着いてくると適正な結実管理により連年生産が可能となる。また、新聞で囲い10℃で貯蔵することにより４月までの貯蔵が可能である。

結実管理

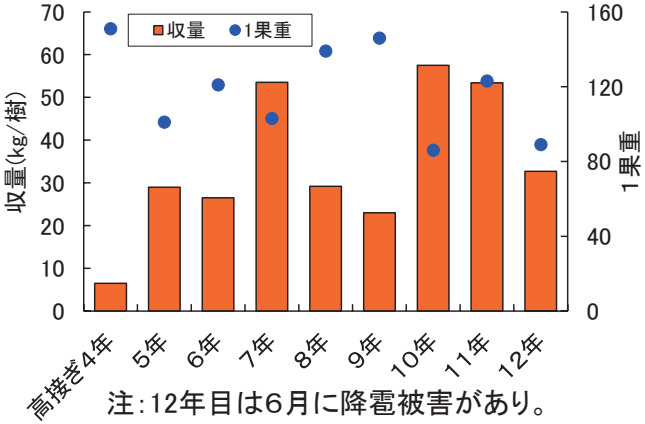
８月のあら摘果で全体の50%程度を摘果し、９月中旬に１m³当たり15果程度に摘果することで大玉果生産できる。



- 果梗枝の太い上向き果・奇形果を中心に摘果する。
- 結果枝葉5枚以上の単生有葉果を主体に残す。
- 葉裏に着果が多く、仕上げ摘果は9月以降に行う。

収量

樹が落ち着いてくると、適正な結実管理により連年安定生産が可能。



注:12年目は6月に降雹被害があり。

台木

ヒリュウ台木を用いると、樹の生育が緩慢となり、果実品質が良くなる。

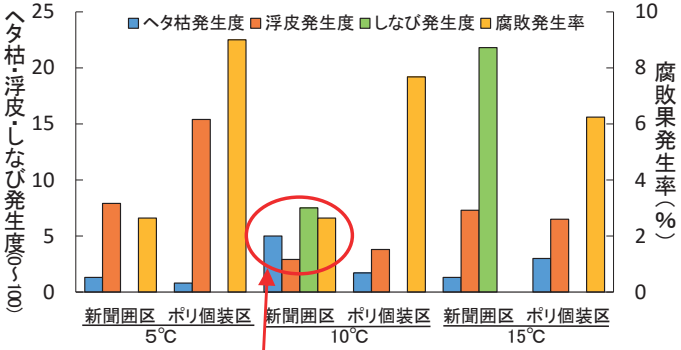
	樹容積 (m³)	収量 (kg/m³)	1果重	Brix	クエン酸 (g/100ml)
ヒリュウ台木	4.2	4.3	103	13.2	1.43
カラタチ台木	6.5	3.4	105	12.8	1.29

カラタチ台

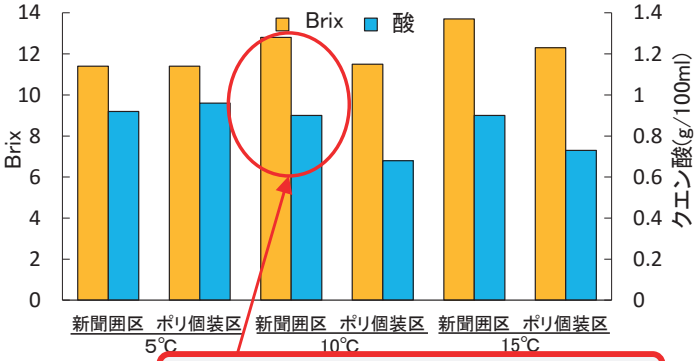
ヒリュウ台

貯蔵技術

1月下旬に収穫した果実をコンテナ内に新聞で囲い、10℃で４月上旬まで貯蔵が可能。



しなびの発生はあるが、腐敗果や浮皮の発生が少ない。



糖度が高く、クエン酸もほど良くある。

- 新聞で囲う
- 10℃で貯蔵